

第 6 回口語詩句賞の授賞

公益財団法人佐々木泰樹育英会（2016 年設立、理事長＝佐々木泰樹）は、2025 年 3月28日に第 6 回口語詩句賞授賞式を開催し、各賞を下記の 7 名に授賞しました。

受賞者

大賞（賞金 100 万円）	渡邊 美愛（筆名 さいう）
奨励賞（賞金各 10 万円）	大嶋 碧月
	奥井 健太
	奥村 俊哉（筆名 長谷川柊香）
	田先 政秀（筆名 田崎森太）
	常田 瑛子
	松下 誠一

選考委員

暮田真名（川柳人）、小島なお（歌人）、杉本真維子（詩人）、高橋修宏（俳人・詩人）、立花 開（歌人）、西躰かずよし（俳人）、林 桂（俳人）、龍 秀美（詩人）

リンク

第 6 回口語詩句賞（総合）	https://sasakitaijuikueikai.or.jp/news/3367/
受賞者投稿作品	https://www.kougoshiku-toukou.com/result/competition/38956/
選考方法・選評・参考作品	https://sasakitaijuikueikai.or.jp/wp-content/uploads/2025/03/ko_a06results.pdf

口語詩句賞は 2019 年度設立の公募の文学賞です。通例、俳句や短歌、川柳、現代詩など、ジャンルごとに評価される日本語の短詩領域において、「口語」であることを軸とし、様々なジャンルの作品を包含する点を大きな特徴としています。

佐々木泰樹育英会は「口語詩句投稿サイト 72h」（www.kougoshiku-toukou.com）を創作・発表のプラットフォームとして、「口語詩句賞」および「口語詩句奨学金」（中学生・高校生・大学生・大学院生）の事業を展開し、口語による短詩の創作活動普及を推進しています。

後援＝一般社団法人現代俳句協会・株式会社思潮社 現代詩手帖編集部

本件に関するお問合せ先

公益財団法人佐々木泰樹育英会 | 東京都中央区明石町 8-1 聖路加タワー 40 階

<https://sasakitaijuikueikai.or.jp/contact/>

受賞コメント・略歴（選考時点）

渡邊 美愛（筆名 さいう）

この度は、栄誉ある口語詩句賞大賞を頂き、心から感謝申し上げます。言葉を紡ぐことは、日々のささやかな営みの延長でありながら、時に世界の輪郭を変える力を持つと信じています。胸奥の呼び声のような潮を、詩というかたちで拾い上げることでできたならそれは何よりの喜びです。支えてくださった皆様、作品を読んでくださった方々に、深く御礼申し上げます。

この賞を励みにこれからも言葉と向き合い、詩の可能性を探り続けていきたいと思っています。本当にありがとうございます。

*わたなべみえ。二〇〇五年生まれ、石川県在住、金沢大学人間社会学域在学。二〇二一・二〇二三～二〇二五年度口語詩句奨学生。

大嶋 碧月

本名で投稿していることが禍し、家族に見つかって言われたことがあった。本名であのような過激な内容を投稿するのはやめた方がいい、就活にも不利に働くかもしれない、とか何とか。大して過激な内容でもないのだが、大体、人の名前を検索するというのは悪趣味極まりない。そして、詩が悪趣味な人々に迎合しなければならぬ謂れはない。

そのような私の詩句に授賞してくださった選考委員の方々と財団には深く感謝しています。ありがとうございます。

*おおしまあつき。一九九九年生まれ、兵庫県在住、神戸大学海洋政策科学部在学。二〇二四年度口語詩句奨学生。

奥井 健太

この度、このような賞を頂き大変光栄に思います。口語詩句投稿サイトを知るまで、口語での句作に取り組んだことが無かった。より身近な言葉での句作に取り組んでみようとして発起し、投稿を始めた。授賞の連絡後、自らの俳句を振り返るとドライな雰囲気を感じた。口語の「です」を切字のように使うことでよりソリッドな印象を受ける。これは口語を使う大きな効果であろう。文語に比べ口語俳句の歴史はまだまだ浅い。受賞を機に、口語俳句にこれからも取り組んでいきたい。

*おくいけんた。二〇〇二年生まれ、滋賀県在住、立命館大学経済学部在学。二〇二五年度口語詩句奨学生。

奥村 俊哉（筆名 長谷川 柊香）

財団からしていただいた支援を文芸の世界にとどまらず、この社会に還元できる人間になれるようにこれから邁進してまいります。

*おくむらしゅんや。一九九九年生まれ、埼玉県在住、東京都立大学大学院経

営学研究科在学。二〇二〇～二〇二四年度口語詩句奨学生。第一回口語詩句賞奨励賞、第二回同奨励賞、第四回同優秀賞、第五回同奨励賞。

田先 政秀（筆名 田崎 森太）

授賞のご連絡を頂いた際、「受賞者の最年長はこれまで四〇代半ばです。ので今回大きく更新されることになりました」と伺いました。私はこの二月で七四歳の高齢者ですが、実は初めて短詩作品（私の場合は俳句）を作ってみたのが二〇二一年の十一月（当サイトへの初投稿は二年の一月）なので未だ創作歴は三年半にも満たない状態です。ここに投稿されている十代の方でもより長い創作歴の方は少なくないでしょう。高齢の身で始めた詩作ですが、もう少し先まで歩んでみようと思っています。

*たさきまさひで。一九五一年生まれ、東京都都在住、無職。

常田 瑛子

「口語詩句投稿サイト 72 h」は私にとってまさに「格闘」の場です。日々、もがき苦しみながら言葉にしがみつき、選者の先生方や他の投稿者の方々から学びながら、短歌という表現を追求し世界を問い続けてきました。

ただただ必死に戦ってきた結果、このような賞をいただけた事を誇

りに思います。表現者としての入り口にやっと立てたような気がします。

佐々木泰樹育英会様、選者の先生方、投稿者の皆様、ありがとうございます。

*つねだえいこ。一九八七年生まれ、山口県在住、学校司書。第五二回全国短歌大会佳作（石川美南選）、令和五年度宇部市芸術祭短歌部門宇部文化連盟賞。

松下 誠一

この度は第六回口語詩句賞奨励賞にご選考いただきありがとうございます。

普段は学生短歌会や結社に所属して短歌を作っているのですが、今年度の口語詩句賞には川柳を多く投稿しました。個人的な考えを言うと、短歌に比べて川柳はより感覚的に言葉を選んでいくように思います。「感覚的に」は気分と言い換えられるかもしれませんが、これからも短歌と川柳それぞれ気持ちを入れ替えて続けていきたいと思っています。

*まつしたせいいち。二〇〇二年生まれ、東京都都在住、東京電機大学工学部在学。二〇二二～二〇二五年度口語詩句奨学生。第五回口語詩句賞奨励賞。

受賞者作品

※選考終了後に対象作品より自選

大賞

渡邊 美愛（筆名 さいう）

さくらばな、ほどの

微熱を

きょうこつに

かかえて蛹化する ひるさがり

仔犬抱き上げ

木洩れ日のファンファーレ

しおかぜに吹かれて

春をまっている

つぼみのようなちわわのあたま

くろわっさん

わしゅわしゅ齧りきみ

と見た星のすべてをおもいだす朝

ぺんぎんの

ひなを

ふたりで見つめれば

むごんに春のひだまり満ちる

ふきげんなわたしに

蝶としてふれる

きみはほころぶことのない風

むーみんのように

陽なたのあぜみちを

ぼちてぼちてと駆けるおとうと

おうごんの

うぶげに

頬をまもらせて

土偶のようにいもうとねむる

ローファーの底

すこしずつ擦り減って

そつぎよう、までの日々へ夕映え

ふたりから

いつか

ひとりになる日々も

ぼたーじゅだけで生きのびてみる

奨励賞

大嶋 碧月

電波うばいあいながら

わがちあうように季語も女も

柿を食えば

柿を食えない季節から

遠ざかってゆく

そんな秋

二度言えば二度淋しい淋しい

【破水】

という言葉の一義性を前にして、

それでも俺は水を破壊できない。

丸写ししたっていいよ。

そうやって、

殖えてきたから淋しいんでしょ？

教わったことも

も無く焚き 無

とむ。火 け

こ こかを れ

うい とる え教ば

腔口縫合の慣習を持たない俺達の

ひらがなにしては尖鋭な明朝体だ

じよせいきのかたちにゆらいして

できたかんじのひとつかもしれない

せん

流刑地に百千の「る」の閉じた口

学生に本分なんか聞いてたら

電気風呂から死人が出るぜ

奥井 健太

VRゴーグルの子に春の蠅

春雨の犬の睡眠時間です

たんぽぽを吹かせて貰う間柄

同僚にロボットがいる南風です

昼寝から私に戻るまでを雨

秋の暮肉屋に今日も店主です

本も食事と同じ机の花野です

雪だるまの体積を求めてください

人間のような天使が炬燵です

燃えるものばかりの部屋を冬の蠅

奥村 俊哉（筆名 長谷川 柊香）

地下室の羽化する兄へ放る葡萄

ピアノさぼった僕を

殴る母

ねぎのにおいがした

りんどうは海底の子の眼

手の影を生む葉を抜くために

プルタブ取る

ゴッホの耳を取るように

金魚は名前を付けると溶ける

海を描く

汗がその一滴となるまで

薄暑なり献血の血を移す音

雪解光の結晶としてあなたの手

鯨が鳴くと

死んだ仲間の骨が光るらしい
君の背骨が光り始める

田先 政秀（筆名 田崎森太）

春隣る双極性に秤揺れ

春の泥鼻血と雑ざるゴーリー忌

（2000 年 4 月 15 日没）

納骨を終えて氷菓にミントの葉

黒点を失くした犬よ片かげり

曼珠沙華（マンジューシヤカ）

辺獄に生きる三倍体

はかまいりゆくみちふさぐわれも
こう

旅人に渡す冬靴

persignarse

（十字切る）

ファノン忌の狼煙と思う

雪風巻（ゆきしまき）

（1961 年 12 月 6 日没）

星々にむささびの撃つ交尾栓

闇に夜の潜熱を知り梟啼く

常田 瑛子

花びらを製氷皿に敷き詰めて
生まれる前のドレスを作る

僕だけが

助からないといいのにな

避難訓練中に閉じた目

両の手を器に桜、受け取って
あの世の底を日だまりにする

雨乞いは雨が降るまで止まなくて
無駄打ちされるホチキスの芯

ペランダで母が煙草をもみ消して

蜚の焼ける音が聴こえた

子ウサギの役が抜け切れない夜の

一オクターブ高い「おやすみ」

歯ブラシを岸に残して

死に顔と寝顔を隔てる川を泳ぐ

怪物になりそうだった夕暮れを

綺麗に畳むための前屈

ほらこれが鍾乳洞のぬめりだと

切手の裏を舐める舌先

光らない灯台よりも無防備な
洗髪台で伸びる首筋

松下 誠一

言い訳に使うミモザを買いにい

前職のクセで背びれが動いちゃう

輪唱を私用に使わないでくれ

大人しくしてれば鱈になれたのに

自己暗示つけてポプラも怖くなる

足あとの付かない森に来てしま

水仙になってもいいですか疲れた

ヒヤシンス同士だったと思います

夜を縫う糸になるからまたあとで

春の手の皴やわらかく言いなおす



第 6 回口語詩句賞授賞式（帝国ホテル・光の間、2025 年 3 月 28 日開催）